

AFC フォーラム Forum

Agriculture, Forestry, Fisheries, Food Business and Consumers

12

2015

特集 インバウンド、農への条件



特集

インバウンド、農への条件

3 農村に起こすインバウンドの動きを追って

本誌編集部「インバウンド」特別取材班

農業経営者は農業体験や農家民泊などで、インバウンド需要を取り込むことができるか。先駆的な事例から、経済的メリットや持続可能性を探る

7 アイデアで外国人観光客誘致の地域力

浪川 桂一郎

訪日外国人旅行者数は今年9月で昨年を大きく上回る。2地域や都道府県観光関連団体などの取り組み事例から農山村の新たな動きを紹介、提案する

11 外国人観光客もターゲットに観光立県戦略

五田 嘉博

地域産業と連携することで、観光は産業になるとの考えを基本に条例を策定する。観光客誘致により地域おこしにつなげる鹿児島県の戦略とは

特別企画

- 15 平成27年度アグリフードEXPO輝く経営大賞（西日本エリア）
～駆け上がる地域農業の担い手たち～
有限会社 かわに／石川県

経営紹介

経営紹介

23 有限会社久在屋／京都府 東田 和久

原料となる大豆は100%国産。また、在来種の大豆でこだわりの豆腐を作る。それは、生産者の魂とその土地の味を感じられる「ほんまもん」だ

変革は人にあり

27 農事組合法人セントラルローズナーサリー／岐阜県 大西 隆

「ミニバラで新たな市場を開拓できる」。そう直感して、生産や技術の体系化を果たした。今、経営者が尽力する日本の花き業界の底上げに向けた戦略とは



撮影：片岡 巖
長野県飯田市
2012年初冬撮影

下栗の里

■ 標高800～1,000メートル、雄大な南アルプスを眼前にする山腹の傾斜30余度という急斜面に、民家や畑が点在する。人々の暮らしが息づく、「下栗の里」だ。急傾斜畑は丹念に耕され、ジャガイモとソバの二毛作やコンニャクイモなどの栽培がなされる■

シリーズ・その他

観天望気

農村インバウンド観光の基本 大江 靖雄 2

農と食の邂逅

有限会社まるせい果樹園／福島県

佐藤 ゆきえ

青山 浩子(文) 河野 千年(撮影) 19

フォーラムエッセイ

運命の出会い 魚住 りえ 22

主張・多論百出

NPO法人いすみライフスタイル研究所

ちばの野菜伝道師

高原 和江 25

耳よりな話 165

肥料資源としての家畜ふん堆肥

加藤 直人 30

まちづくりむらづくり

交流人口を増やすグリーンツーリズム

1回泊まれば遠い親戚、10回で本当の親戚

NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会

宮田 静一 31

書 評

弘兼 憲史 著『島耕作の農業論』

村田 泰夫 34

インフォメーション

農業の担い手が県内最大農業法人を視察

秋田支店 35

千葉の農業の「今」をラジオで紹介 千葉支店 35

20周年記念の交流会と記念式典を開催

九州地区統轄 35

大阪市内で食品産業の企業交流会を開催

近畿地区統轄 35

新規就農を希望される方へ 36

みんなの広場・編集後記 37

ご案内

第9回アグリフードEXPO大阪2016 38

観天 望気

農村インバウンド観光の基本

現在、わが国では「インバウンド」が流行語となっている。中国人観光客の爆買いを目にすると、その言葉が魔法のように聞こえるのも無理はない。これは、わが国だけの現象ではなく、私が研究のフィールドにしている欧州でも同様である。

過去二〇年、イタリアでのアグリツーリズムは一貫して右肩上がりの成長を続けてきた。その重要な要因は、短期滞在する国内観光客と、長期滞在する中・北欧からの外国人観光客、この二つの市場を持っていることである。これが安定した成長をもたらしてきたことは間違いない。しかし、わが国の場合、農村では国内市場に極端に偏っている点が大きな違いと言える。

ここで、よく質問されるのが、日本人は英語ができないということについてである。ご安心あれ。イタリア人の農家も一般に英語はできない。片言どころか、全てイタリア語で通すこともある。ここはイタリア人得意のジェスチャーで切り抜ける。英語はできるに越したことはない。しかし、英語が先にあるのではなく、自信を持って外国人を迎えられる本物のサービスや資源を有しているかということが何より大事なのである。これは、国内観光客に対しても、本質的には変わらない。それが基本である。つまり、農村のおもてなしとは何かを、分かりやすく明確にすることである。

例を挙げると、今世界中から注目を集める中国人観光客は、都会での買い物やメジャーな観光地にしか興味がないのではないかと、このように見方よく聞かれる。その答えは、現在のところイエスである。しかし、かつて日本人もそうであったように、一人や家族だけでなく、少数人数で旅行をする旅慣れた二世帯が増加している。彼らは、これまでに未体験の場所、活動や出会いを求めている点で、農村やそこでもてなしは彼らの興味を喚起する可能性が高い。

欧州では、この二世帯中国人観光客をターゲットにしようとする動きも、すでに出ている。従って、今後は、こうした二世帯を標的層としてニッチな市場を開拓すべきである。

日本の農村は清潔で美しい、と海外の友人たちは口をそろえる。自らの伝統や文化に自信を持って、外国人観光客を迎えよう。

千葉大学大学院園芸学研究科 教授

大江 靖雄



おおえ やすお

神奈川県生まれ。博士(農学)。農林水産省食と地域の交流促進対策交付金評価委員会委員長、農業技術功労者表彰(2014)、The Sohn Hai-Sik Award (2010)。著書は『農業と農村多角化の経済分析』(農林統計協会)、『グリーン・ツーリズム』(千葉日報社)など。

ひとつ目標を達成すると
次にやりたいことがあり
目標は次々にやってくる
観光果樹園の仕事は
おもしろいです

農と食
の邂逅

佐藤 ゆきえ さん

福島県福島市

有限会社まるせい果樹園

三・一一大震災の影響で経営は大打撃激を受ける。激減した売り上げは創意工夫と地道な努力で回復しつつある。TPP合意などグローバル化時代に、農園経営にGAP認証を導入するなど観光果樹園の新たな道を探る。





P19: 東京都生まれ、小学生の時に福島県に移った。二人の息子の母でもある P20: 観光果樹園としては県内最大規模の8ha。従業員は5人。夫の清一さん(左)についてゆきえさんは「私も話好きですが、夫の方がもっと社交的です」(右上) 「看板娘」ならぬ「看板嫁」として毎日明るく接客(右下右) 広い園内をカートで案内する(右下左) 「百姓魂」がひとときわ目立つスタッフジャンパー (左)

プラス思考で風評克服

「落ち込んだ売り上げをどうすれば挽回できるか。そのことだけを必死に考えました」。東日本大震災後の東京電力福島第一原発の放射能漏れ事故で、福島県の観光客は激減した。観光果樹園を営む有限会社まるせい果樹園の売り上げも一時、震災前の約三割まで落ち込んだ。でも、「ネガティブにならない性格」という佐藤ゆきえさん(四四歳)は、首都圏などでの復興イベントに積極的に参加し、サクランボに始まり、桃、梨、リンゴ、ブドウ、柿と続く季節の果物をPRした。

ある日のイベントで、一人の男性が立ち止まり、ゆきえさんが差し出すリンゴに手を伸ばした。その場を立ち去った男性は、他のブースで試食を終えてまた戻ってきた。そして、ゆきえさんの目の前で携帯電話をかけた。めした。「まるせいさんのリンゴを扱うことに決めたから」

男性がある大手小売店の幹部だと知ったのはその後のことで、思いもかけないチャンスだった。「味を評価されたのがうれしかった。高価ですが、質のいい肥料を使っているし、小まめに園地の管理をしてきたことが評価につながったと思います」と、当時を振り返る。筆まめなゆきえさんは、観光客を送り込んでもらうために観光業者を訪ねる際も筆ペンと便箋を持参して、その日のうちに礼状を送ってきた。千載一遇のチャンスとなったこの出会いを活かそうと、大手小売店の幹

部にも定期的に手紙を送った。

二三歳で美容ビジネスを起業するに当たって、経営者になるための人材教育の研修を受けた。厳しい研修だったが、経営者としての基礎を築くことができたという。人の心を動かすには感動を与えなければならぬことを学び、自ら決めた目標にどうすればたどり着けるかを考え、行動することを身に付けた。手書きの手紙はその一つだ。

さらに取り組んだことがJGAP取得だ。GAP(農業生産工程管理手法の一つで、Good Agricultural Practiceの略)という概念や認証制度があるのを知ったのは震災後だったが、作業マニュアルや農作業事故を未然に防ぐ仕組みを作ることこそ、ゆきえさんがやりたかったことであり、自分なりに少しずつ進めてきたことだった。

GAPで作業の見える化

非農家出身のゆきえさんは、果樹試験場や地元JAなどで働いた後、美容関係のビジネスで起業。現社長の清一さん(四五歳)との結婚後も美容の仕事が続けたが、二人目の子どもの出産を機に家の農業を手伝い始めた。

軒先販売とJA出荷が中心だった販売体制を、観光と直販中心にシフトしていこうという時期で、母の和子さん(六九歳)の名前をとり新設した「かずちゃん直売所」で接客に当たってきた。剪定や摘果などに多くの労働力を要し、「自分が作業に出れば人件費の負担が少しでも軽くなる」と気付き、やがて園

地での作業にも関わるようになった。

「今日は西の方の畑に行ってくれ」と指示されたが、どの畑のことかゆきえさんには分からなかった。そこで、自分では場マップを作り、口伝えて教わるのが当たり前の剪定方法も本を読んで自分で絵を描いて、どういう仕立てにすればいいのかを研究した。そう



サクランボ、桃、梨、リンゴ、ブドウ、柿と、春から晩秋まで途切れることなく果物狩りができる。2015年8月に開店したカフェ「森のガーデン」にて

すれば将来、果樹栽培をやったことのない社員に教える場合にも役立つと思ったからだ。

JGAPは、作業の見える化を進めてきたゆきえさんにとってドンピシャの手法だった。早速研修を受け、自ら指導員の資格を取り、二〇一三年六月に農場が認証を受けた。「認証を取得しただけで、売り上げが伸びる

わけではありませんが、活用の仕方次第だと思います」と、ゆきえさん。

認証取得後、二ヶグラム入りの桃を梱包する際、計量することをマニュアルで決めた。今まで熟練の技で箱詰めをしてきたが、わずかでも桃が小さく二ヶグラムに満たないと、輸送中に箱の中の桃が揺れて傷つき、クレームにつながる。マニュアル導入後、五〇〇ケースの注文でクレームはゼロとなった。

大手小売店の幹部には、GAPとの出会いから取得までの過程をその都度手紙につづった。その思いが通じて、当初は「福島県産りんご」としての販売だったが、今では「JGAP認証取得まるせい果樹園」と、名前入りで販売してもらえるようになった。

震災以前にも増して忙しく仕事をこなし、過労で倒れてしまい救急車で運ばれたこともあったが、それでもゆきえさんは仕事のペースを緩めようとはしない。

終わらない経営はおもしろい

今年八月、園内にもぎたての果物を使った各種デザートが楽しめる「農家カフェ 森のガーデン」を開いた。震災前からゆきえさんたちが温めてきた構想の一つだ。福島市におよそ一〇〇カ所ある観光果樹園の中で、まるせい果樹園は後発だ。初めは個人客を地道に増やしていったが、知名度が高まるにつれ、観光業者と提携してバスを送り込んでもらう比率が高まった。その間、ゆきえさんは「次はどうするか」を考えてきた。「道路事情が変

わると人の流れも大きく変わってしまう。たまたま寄ってくれるお客さんではなく、ここを最終目的地にしてくれる人を増やしたい」

そこで、工夫を凝らして思い出に残る果樹園造りを始めた。同じ果物でも収穫時期が異なる品種を植えることで、いつでも実がなっているように工夫した。さらに「動物がいれば楽しい」とアイガモと鯉のいる池も造った。笑いの絶えない接客も心掛け、果物狩りにきたお客さんにはゆきえさんやスタッフが園地まで案内して、どの辺りがおいしいのかを丁寧に説明する。「リンゴは、軸を持ってお尻の部分を引きゅつとひねるともげます。その時、お客さんがお尻を引きゅつと締めてもヒップアップにはなりません」などとユーモアも忘れない。「人は誰でも楽しい記憶は残りますから」。今年は震災前の売り上げである八〇〇万円台まで回復する見込みだ。それでも「まだまだ」とゆきえさんは表情を引き締める。「売り上げを元に戻すのはこれまでの経験値でできても、さらに増やすには新しい発想が大事です」

すでに二〇二〇年の東京オリンピックも視野に入れ、来日する外国人へのPRを考えて、取引中の大手小売店とは東京オリンピックの会場予定地近くの店舗でも販売してもらえるように交渉して見事実現した。「一つ目標を達成してもその次の目標があつて、経営っておもしろいんです」。根っからの経営者だからこその一言だ。

（青山浩子／文 河野千年／撮影）



私はお酒が好きだ。とりわけ「国酒」とも呼ばれている日本酒を愛してやまない。日本人ならいろいろ知っているべきだろうという気持ちがあるとき生まれ、飲み始めた日本酒。愛飲歴は、かれこれ一〇年以上になる。当初、全く知識のなかった私は『居酒屋』という分かりやすいタイトルの雑誌を買い、東京都内のおススメの居酒屋を探訪した。有名ところをはしごし、あれもこれもと欲張ってはいろんな銘柄を試しに飲んだ。そんな居酒屋巡りをするうち、自分好みのお酒と料理の組み合わせも分かるようになった。さらに今では、最強の組み合わせを編み出すことが楽しくて仕方ない。

ある時、とある居酒屋で運命的な出会いをした。運命の出会いって、友人や恋人だけではないんだ！と感じたほど衝撃的だった。お相手は「純米無濾過生原酒」。聞きなれない言葉かもしれないが、これも日本酒。日本酒は、出来上がってから濾過、熱を加えて発酵を止める処理がされ、ものによっては加水し味を調整されているものが多い中で「純米無濾過生原酒」は手を加えず、なんと出来た酒そのものを瓶詰めする。そのため、「すっぴん」の裸のお酒とも言われる。

私は以前、蔵元で仕込みの体験をさせていただいたことがあるが、杜氏さんの高度な技能と酒に対してのまなざしに畏敬の念を抱いた。その杜氏さんに絶対の自信がないと世に出せない貴重な代物だ。「すっきりしたお酒」「香りがあってフルーティ」などと日本酒は表現されることが多いが、これは全く逆をいく。初めて口にしたとき、今までの日本酒の概念が吹き飛び、頭をガーンと一発殴られたような気がした。「自分が知っているものとは全然違う。これは全く別の飲み物だ……」。どっしりとした濃い味、それでいて酸味が強くキレが良い。酒米や麴をそのまま食べているかのような非常に強いうまみを感じる。

さて、この個性的なお酒に私が合うと思う料理は、今のところ、カレーうどんだ(笑)。強い酸味とうま味がスパイシーな味を受け止める。さらにブルーチーズを乗せて少しづつ溶かしながら、が最高の相性だと思っている。新酒は冬から春にかけて出回ることが多い。とうとう待ちに待った季節が巡ってきた！カレーうどんを超える組み合わせを見つけられるだろうか……。想像するだけで、楽しい。



フリーアナウンサー
魚住 りえ

うおずみ りえ
大阪府生まれ。広島県育ち。
1995年慶応義塾大学卒業後、日本テレビ入社。2004年フリーに転身。分かりやすく、心に響く語り口が人気で、テレビ、ラジオを問わず幅広く活躍中。06年から「魚住式スピーチメソッド」を立ち上げ、話し方を磨くための指導を行っている。

運命の出会い

NPO法人いすみライフスタイル研究所
ちばの野菜伝道師

高原 和江 (四四歳)



●たかはらかずえ●
日本野菜ソムリエ協会認定シニア野菜ソムリエ。二〇一四年に千葉県知事より「ちばの野菜伝道師」に任命される。現在、NPO法人いすみライフスタイル研究所理事長として、田舎暮らしに関する情報発信や空き施設の活用・中間支援など地域活性化に取り組む。

食

への関心が高まっている中、私たち生活者は、自分自身の体をつくっている食べ物について、まだ知らないことがたくさんあります。「安心できる農産物をおいしく食べたい」生活者と、「丹精込めて作った農産物を安心してたくさん食べてほしい」生産者。お互いに同じような想いを持っていますが、身近にいるはずの両者の距離は意外に遠く、考え方や情報にも少しずれがあるようです。

千葉県は、気候や立地条件に恵まれた全国屈指の農業県で、収穫量全国一位を誇る野菜も多く、身近に生産者がいることの安心感や農産物の鮮度の良さなども大きな魅力です。しかし、県民の多くはそのことを知らず、県民の成人一人当たりの野菜摂取量は全国平均のレベルにとどまっているのです。

この現状を生活者に理解していただき、県産の野菜の消費拡大につなげようと、千葉県は生産者からの一方的な情報発信ではなく、生産者と生活者相互の情報を共有するため、「ちばの野菜伝道師」と「ちば

の野菜伝道師協力隊」を任命しました。生活者の視点で多くの方々に野菜の魅力や食べ方を伝えること、生産者や産地の方々が気付いていない魅力を発掘することなどを役割としています。

現在、唯一「ちばの野菜伝道師」に任命された私は、「ちばの野菜伝道師協力隊」である野菜ソムリエの資格取得者の活動団体「野菜ソムリエコミュニティちば」の皆さんと共に、県産農産物のPRやレシピ開発などを行っています。活動の一環で産地に伺い、生活者を代表して生産者と意見交換をすると、お互いの考え方にずれがあると、気付くことがあります。

例えば、ネギの長さについて、生活者から「冷蔵庫に保存したり、持ち運んだりするには、もっと短い方がいい」といった意見がありました。これは、生産者にとっては思いも寄らないことだったようです。なぜなら、規格に合わせて生産することが当たり前になっていて、短いものは売り物にならないからです。それが生活者に求められているとは、生産者としては考えも

しなかったというのが、正直なところなのでしょう。

ま

た、この意見交換の場で生産・梱包・流通などの流れを生産者に説明していただいたことで、生活者はネギを手にするまでの過程や苦勞などを知り、応援しようという気持ちが一層高まりました。これは一例ですが、同じようなことが多く考えられます。

生活者は、生産者が自分の農場で栽培している農産物についてとても詳しく、きつとおいしい食べ方も知っているはずと期待しています。しかし、「おいしい食べ方やお薦めの食べ方などがあつたら教えてください」と生産者に伺っても、いつも食べている料理を「人に薦めるほどのものではありません」と言って、具体的に教えていただけないことが多いのです。

生産者にしか知り得ない農産物に関する情報は、たくさんあります。意識していないくらい日常のことこそ、生活者に求められていることが詰まっています。収穫した農産物そのものの魅力はもちろんですが、その農産物ができる過程や食べ方を伝えることも大切です。生活者はそれを知りたいと思っています。生産者自身も生活者です。生活者が何を感じ、

何を求めているのかを考え、また伝えるべきことを意識して、日常的なことでもどんどん声に出していただきたいと思います。情報を発信することで農産物に魅力を感じた生活者が味方になり、応援してくれるようになるのです。生産者と生活者の接点はまだ少ないのですが、収穫体験など交流できる機会を活かすのも良いと思います。

どんなことをするにも健康が第一。私たちの体が、日々食べている農産物などでつくられているということは、それらが健康維持に影響するということです。生活者は、農産物そのものだけではなく、それができる過程や自分の体を作る食べ物に関心を持たなければなりません。自分が望む食べ物を生産者につけてもらうために、まず農産物の生産過程などをよく知ること、そして食べることで生産者を応援できるといことも理解してほしいと思います。

生産者と生活者、お互いの想いを通じるように、私自身も「ちばの野菜伝道師」として「ちばの野菜伝道師協力隊」の皆さんと共に、生産者の皆さんを応援しながら、生活者との懸け橋となつて、引き続き取り組んでまいりたいと思います。

F

農産物の情報こそ、生産者と生活者が コミュニケーションをとる機会を作る

肥料資源としての家畜ふん堆肥

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業総合研究センター 土壤肥料研究領域長

加藤 直人

家

畜ふん堆肥中の肥料成分、特にリン酸やカリウムの有効利用に熱い視線が注がれています。日本は化学肥料やその原料の大部分を輸入に頼っており、年間需要量は窒素、リン酸で約四五万トン、カリウムで約三万五トンです。

一方、家畜ふん堆肥に含まれる有効な肥料成分量は、窒素で約二万トン、リン酸で約一七万トン、カリウムで約二四万トンと試算され、これらの肥料成分を上手に使うことが

できれば、化学肥料の使用量が削減され、さらに肥料コストの低減も可能になります。

リン鉱石やカリウム鉱石は有限の資源であり、その使用量を可能な限り減らし、将来にわたって持続的な肥料供給を確保することは全世界で共有すべき課題です。

しかし、有効な肥料成分量が堆肥ごとに大きく異なることや、広域流通が困難で、また散布労力がかかるため、家畜ふん堆肥の肥料

成分を上手に使うことは容易ではありませんでした。また、有効な窒素がリン酸やカリウムに比べて少ないので、リン酸やカリウムが蓄積傾向にある日本の農地では使いにくい状況になっています。

そこで、有効な窒素を高める、有効な肥料成分量を明示する、ペレット化や粒状化などにより耕種農家が保有する施肥機で施用

する取り組みが進められました。これにより、施用量や施用時期が適正化されるとともに、散布労力も軽減されます。また、何よりも堆肥が肥料の代替品として使えることを生産者に実感していただけることが重要です。

こうした取り組みの例として、岩手県農業研究センター、有限会社三沢地域環境保全組合、プライフーズ株式会社と農研機構中央農業総合研究センターは、共同研究

により高窒素鶏ふん肥料を

開発しました。この肥料は、

普通肥料登録をした鶏ふん

堆肥に尿素を混合、ペレット

成型したもので、二〇一四年

春から受注生産が開始され

ました。現地実証試験の結

果、ブロードキャスターや畝

内部分施肥機で精度よく施

用でき、水稲では二〜五割、

キャベツでは四割、肥料費を

削減できました。

以前は、堆肥のような特殊肥料と普通肥料を混合・

販売することは禁止されていましたが、二二年

に混合堆肥複合肥料の公定規格が新設され、堆

肥に窒素肥料などの普通肥料を混合製造する

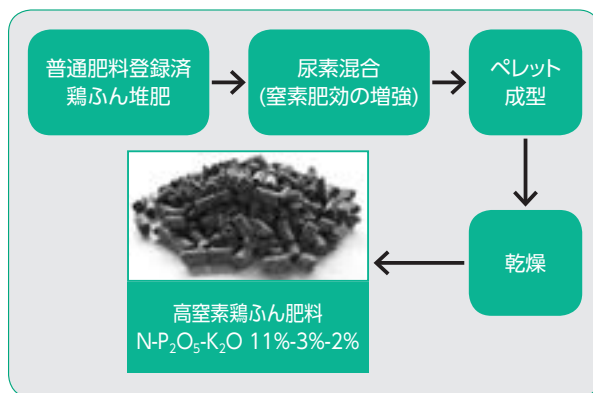
ことが可能となりました。今後、混合堆肥複合

肥料の普及拡大には、成分量の安定した原料堆

肥の確保が必要であり、畜産側の協力も必要に

なります。畜産が国内の貴重な肥料鉱山とし

て、その機能を発揮しつつあります。



Profile

かとう なおと
1959年東京都生まれ。早稲田大学理工学部卒業後、農林水産省農業技術研究所に入所。主に土壌中における多量要素の動態と肥料特性の研究に従事し、2007年4月より農研機構中央農業総合研究センターに勤務。12年4月より現職。



交流人口を増やすグリーンツーリズム 一回泊まれば遠い親戚、一〇回で本当の親戚

大分県宇佐市安心院町

NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会 会長

宮田 静一



荒れたブドウ畑に危機感

「これは新たな収入源になる」

この言葉を地域住民から聞きたいために、一九九六年九月、実験的に会員制の農村民泊（以下、農泊）に取り組んだ。試行錯誤はあったが、今や地域の中核プロジェクトになっている。これが、全国で取り組まれているグリーンツーリズムの発火点と言えよう。

これからお話しするのは、九州の大分県宇佐市の安心の院と書いて「あじむ」と読む町での取り組みである。この町は作家の司馬遼太郎氏が「日本一の盆地の景色」と絶賛した純農村で、コイとスッポンとブドウの町として知られている。地名に「心」が付く珍しい場所だが、実は日本ではどこにでもある過疎化が現在進行形で進む町なのだ。

約四五年前、私がブドウ専業農家として就農した当時、安心院町は国営のパイロット事業が始まり、三五〇軒、三五〇戸のブドウ農家が誕生した。

しかし、その約二〇年後にブドウ農家は半減し、耕作放棄地が増え、ブドウ畑は荒れていった。安心院のグリーンツーリズムの原点は、この「荒れたブドウ畑」を何とかしようと農家が動き出したことにあった。

九三年に地域の行く末を懸念していた大分県職員と農家四人で「アグリツーリズム研究会」を発足し、月一回の勉強会を開いた。

農家の新しい生き方として、ヨーロッパが発祥のアグリツーリズムに注目した。しかし、過疎化が進む地域で、このプロジェクトを実現するのは難しいと、現実的には考えられないまま一年が過ぎ、中心的存在であった県職員の人事異動を機に、勉強会は終わってしまった。

事態はその後とも深刻になるばかりだった。農業に限らず、地域全体の問題として捉えられるようになり、今こそ手を打たなければならないと地域住民と共に、九六年三月に「安心院町グリーンツーリズム研究会」を立ち上げた。私たちは、「農

村」の意味合いを強くしたグリーンツーリズムで、地域を活性化させようと動き出したのである。

しかし発足当初は、この取り組みについて地域住民全てに理解が得られたわけではなく、中には「グリーンツーリズムが農業の足を引っ張るのではないか」と言う人もいた。さまざまな反発はあったものの、この取り組みを続けてきたことで、全国の多くの農村にグリーンツーリズムが広がって定着している。これによって農村が今や経済的に助けられ、潤っている。

会員制実験的農泊を決行

話を当時に戻そう。会発足後、とにかく一度、人を泊めてみることに始まらないと、私は農泊を実行するため、地域住民に協力を仰ぎ、打ち合わせを重ねた。初めは料金設定などについて、さまざまな意見があり、なかなか思うように話が進まなかった。

しかし、次第に「農泊が地域の産業になるかど

profile

宮田 静一 みやた せいいち

1949年大分県宇佐市生まれ。72年日本獣医畜産大学卒業後、安心院町の国営パイロット事業で3ヘクタールにブドウ植栽。89年ブドウの直売所開設。92年にアグリツーリズム研究会を発足し、会長に就任。96年に安心院町グリーンツーリズム研究会を発足し、会長に就任。2002年に大分県グリーンツーリズム研究会を発足し、会長に就任。03年に国土交通省カリスマ百選「農村民泊さがけのカリスマ」に認定。

NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会

前身のアグリツーリズム研究会を経て、1996年に発足。グリーンツーリズム発祥の地として知られ、年間延べ1万人の受け入れを行う。農泊や教育旅行の受け入れの他、地域のお母さんたちの手料理を味わってもらう「スローフード感謝祭」といったイベントを開催。「ヨーロッパ研修」や、農泊実践者の質の向上のための「大分・安心院グリーンツーリズム実践大学」などの研修も実施している。

うかを確かめてみたい」という私の強い思いがみんなに通じ、八戸の農家が宿泊先として名乗りを上げ、協力してくれることになった。

そこで、実験的農泊の決行日を九月に開催される町の最大イベント「ワイン祭り」に合わせた。料金は一泊朝食付きで三〇〇〇円とし、農泊に参加する人を外部募集した。その時、あるがままの家屋を利用して宿泊客を受け入れるため、宿泊客には会員になってもらうことに決めた。

当日、福岡県などから、三十八人の方が会員となつて安心院に泊まりに来てくださった。会員には、それぞれの受け入れ先である農家に宿泊し、その家族との団らんを楽しみ、翌朝には地域でとれた食材を使った郷土料理を食べていただいた。多くの人たちが「親戚の家を訪れたようで、リ

ラックスして過ごすことができた」と満足していただけたようで、私たちは手応えを感じた。

この時、地域住民は自分たちでは気付くことができなかった地域の魅力を見いだし、この田舎暮らしがいかに恵まれているのかを知ったのである。

このことをややオーバーに歴史上の出来事に例えるなら、農村という港へ、都市住民という文化が異なる人々が渡来した、まさに黒船来航と言える。それほど安心院の人たちに都市住民との交流は大きな衝撃を与えたのである。

反省会では、農泊を受け入れたある農家が「これは収入源になると思った」と発言した。その農家には五人が訪れ、一泊朝食付きで合計一万五〇〇〇円のお金が入ったのである。農泊が地域の産業になるかもしれないと、地域住民たちに実感し

てもらったのであったのである。二〇年たった今でも、この農泊が続いているのは、この第一回目の成功があったからだと思っている。

ドイツでカルチャーショック

実験的農泊を終え、次に私たちはグリーンツーリズムの本場である欧州へ研修に行くことを計画した。会が発足した年の二月に、約七〇人が第一陣としてドイツを訪れた。基幹産業が農業であるドイツでは過疎という言葉がなく、環境や景観を重要視しており、電信柱や大きな看板がないなど、さまざまなカルチャーショックを受けた。

それ以降、毎年研修で訪れているフォークトゥールク市は人口六〇〇〇人で、グリーンツーリズムの総売り上げが三〇億円あり、そのうち宿泊費



上：ドイツへ研修に行ったときの様子

下：教育旅行で訪れた中学生と食卓を囲んで

一〇億円、残りの二〇億円は農産物の直売やレストランなどの売り上げである。住民全員がグリーンツーリズムに関わっており、農泊で地域経済が循環するシステムができてきているのだ。

特に、宿泊人数八人までは営業許可が不要というのには驚き、日本の法律を変えられるかもしれないと思った。帰国後、ドイツのグリーンツーリズムを目標として、私たちは本格的に動き出したのである。

一九九七年に安心院町で「グリーンツーリズム推進協議会」が発足し、行政による支援体制が整い、推進に弾みがついた。

すると、新たな問題が生じた。来客数が増えるにつれて、この農泊が旅館業法や食品衛生法に抵触する恐れが出てきたのだ。しかし、二〇〇〇年に旅館業法と食品衛生法が県の管轄になり、私たちの要望によって県が〇二年にグリーンツーリズム通知を発出したのである。これにより規制が緩和され、農泊が旅館業法における営業許可対象となり、食品衛生法で定められていた宿泊客専用の調理場の整備が不要となった。私たちの活動が、国の法律をも変えるきっかけとなったのである。

一〇回泊まれば本当の親戚

現在、安心院の農泊は、「一〇回泊まれば遠い親戚、一〇回泊まれば本当の親戚」がキャッチフレーズになっている。原則、受け入れ先である家の家族としてお客さんを迎え、その家が一番得意な料理を提供している。宿泊料金は少し値上げさせていたが、大人一人当たり一泊朝食付き五三〇〇円、一日一組を受け入れ、入浴は町内の温泉施設を

利用していただいている。

また、宿泊客のために特別なプログラムを組まずに、宿泊先の各家庭の事情に合わせて農業体験や竹工芸体験、郷土料理づくりなど、さまざまな体験ができるようにしている。

例えば、わが家はブドウ専業農家なので、五、六月は主にブドウの袋掛け作業、秋は観光客に対するブドウ狩りの案内係りや、干しブドウ加工、冬はブドウのせん定枝を集めて燃やしながらかき芋づくりなどを体験することができ、約六〇戸ある受け入れ先の家庭全部にそれぞれ違った特色があることが売りとなっている。

農泊の最大の魅力は、受け入れ家庭との交流と団らんであり、宿泊客が安心院を「第二のふるさと」としてもらえ、受け入れ家庭をはじめ、地域一丸となって取り組んでいる。

安心院のグリーンツーリズムによる一番の収入源は、教育旅行と視察研修の受け入れである。

昨年度は、埼玉県、京都府、大阪府、広島県から三八校約六〇〇〇人の中高生を教育旅行で受け入れた。生徒をわが子のように迎え、農泊受け入れ家庭との交流や、農業や農村を身近に感じてもらえるよう、さまざまな体験を実施している。

何年か前に京都から来た中学校の校長先生が、安心院にきたことを「夢の旅にやってきました」と言ったことが、印象に残っている。私たちは決して慢心せずに、心せねばと思った。

次に多いのが、視察研修だ。特にここ数年、韓国からの視察研修が多くなっている。昨年度は、一五〇三〇人単位で約二〇〇人が訪れ、事務局が主催する安心院のグリーンツーリズムに関する研

修を約一時間受けた後、五、六人単位でそれぞれの受け入れ家庭に農泊していただいている。

そして、場合によっては農業体験なども実施している。言葉は通じないが、交流の中で心が通じ合い、何を伝えたいのか分かるようになる。研修を終えた翌朝の出発時には、別れを惜しむ様子が私たちの心にも伝わってきて、大切な国との民間交流に一役買っているのだと実感している。

そして、二〇〇五年にグリーンツーリズムの担い手育成とさらなる普及を目的とし、年五回、二日間のプログラムで「大分・安心院グリーンツーリズム実践大学」を開校した。

農泊の受け入れ家庭の知的小および技術の質の向上を図るために、幅広い分野の講師を招いている。どんな仕事でも質を保ち、向上するためには、一流から技術を習得することが重要だ。

現在、約六〇戸ある受け入れ家庭において、一戸当たりの年平均受け入れ泊数は、約二〇〇泊であり、家庭の手取りは平均約一二万円に上る。農泊の市場規模はまだ小さいが、今では農村での立派な成長産業になっていると言えるのではないだろうか。

旧安心院町は宇佐市に合併して今年で一〇周年であるが、一〇年前の人口八二〇〇人が、今では六二〇〇人まで減ってしまった。依然として、人口減少は止まらない。「町の人口が減ってしまう分、グリーンツーリズムによって生み出される交流人口を増やしていこう」。私はそう思いながら、安心院、そして全国でグリーンツーリズムに取り組み同じ志を持ったみんなと、手を取り合っていきたいと思っている。

『島耕作の農業論』

弘兼 憲史 著



(光文社・740円 税抜)

農業はクリエイティブだ

村田 泰夫

(ジャーナリスト)

週刊『モーニング』の人気連載漫画「島耕作」シリーズの作者、弘兼憲史さんの農業論である。「課長島耕作」が、いつの間にか「社長」になり、ついに「会長」になっていたことを、今回初めて知った。会長となって初めて取り組んだテーマが農業だという。

会長となって財界活動に乗り出す島耕作に、弘兼さんは農業問題を担当させることにした。旧知の新浪剛史さん(サントリー社長)との出会いがきっかけで、農業こそが日本を支える次の産業になると確信したからだ。光文社新書の帯にはこうある。「農業は、クリエイティブで、カッコイイ仕事だ!」

この本で、弘兼さんは「攻めの農業論」を展開している。「農業はもうからない」とか「将来性がない」などという認識が農業界の多数派だが、そんな

ことはないという。農地面積が日本の四割にすぎないオランダは、農産物輸出額で米国に次ぐ世界第二位を誇る。狭い農地を効率的に利用し、世界トップクラスの収益を上げる農業経営を実現している。

さらに、オランダでは農業生産者と大学が協力し合って新しい技術を開発する「フードバレー」が形成され、世界中から専門家が集まっている。そこには「遅れている産業」といった後ろ向きな認識は全くない。

オランダ農業を現地で視察した弘兼さんは「農業は面白い。農業はもうかる。そのことをもって若い人たちに伝えていくことが大切だ」と強く思うようになった。

弘兼さんの農業論は、多くの国民が抱いている農業観に近いと思う。食味や安全性などの品質面で優れた日本の農産物は、世界的に高い評価を得ている。作物や家畜を育てる農業は、クリエイティブで楽しいはずだ。

しかし、農業界に広がる悲観派の認識は違う。「規模が小さく、海外と競争できない」「自由化で壊滅的打撃を受ける」と、まるでお先真っ暗である。環太平洋経済連携協定(TPP)で日本産農産物の輸出の可能性が開けることについても、悲観派は消極的というよりむしろ否定的である。

弘兼さんのような非農業界と、農業界で支配的な悲観派との農業観の食い違いが、今日ほど目立つときにはない。この深い溝を埋める不断の努力が欠かせない。

読まれています 三省堂書店農林水産省売店 (2015年10月1日~10月31日・税抜)

タイトル	著者	出版社	定価
1 日本のTPP交渉参加の真実 その政策過程の解明	作山 巧/著	文眞堂	2,800円
2 亡国の農協改革 日本の食料安保の解体を許すな	三橋 貴明/著	飛鳥新社	1,389円
3 減反廃止 農政大転換の誤解と真実	荒幡 克己/著	日本経済新聞出版社	2,600円
4 農業と経済 2015年12月臨時増刊号 世界をゆるがす中国農業 食料需給の現状、農業構造改革、農村問題に迫る		昭和堂	1,700円
5 ビジネス思考の日本創生・地方創生 協創力が稼ぐ時代	笹谷 秀光/著	ウィズワークス	1,500円
6 島耕作の農業論	弘兼 憲史/著	光文社	740円
7 誤解だらけの遺伝子組み換え作物	小島 正美/編	エネルギーフォーラム	1,400円
8 食品を科学する 意外と知らない食品の安全	食品の安全を守る賢人会議/編著	大成出版社	1,500円
9 series田園回帰 2 総力取材 人口減少に立ち向かう市町村	『季刊地域』編集部/編	農山漁村文化協会	2,200円
10 地方創生ビジネスの教科書	増田 寛也 /監修	文藝春秋	1,200円

農業の担い手が 県内最大農業法人を視察

八月二日、秋田県の若手農業後継者の交流会である「農Future」の第一回例会として、経営視察および講演会を開催し、二三人にご参加いただきました。

大仙市で大規模集落営農および野菜加工に取り組む農事組合法人たねっこを視察した後、代表理事の工藤修氏から、経営展開や後継者育成の重要性などについてご講演いただきました。

参加者からは、「集落型営農の経営展開を学べて有意義でした」「人材活用について大変勉強になりました」「など」などの感想が寄せられました。

(秋田支店)



工藤代表の講演を真剣に聞く参加者

千葉の農業の「今」を ラジオで紹介

七月から九月まで毎週一回、全三回にわたり、地元FM「ラジオ成田」で、一〇分間の農業PR番組「アグリクリップ」がオンエアされました。

一三人の職員が担当分野について台本を書き、DJと共に声で出演。千葉県の農業の「今」を、さまざまな角度から紹介しました。リスナーから番組内で取り上げた焼き芋についてラジオ局に照会が相次ぐなどうれしい反応もありました。放送を通じて多くの方々に千葉の農業や食料の重要性について、より理解を深めてもらえたのではないかと思います。

(千葉支店)



「農業女子の回」にてDJ人見さん(左)と

二〇周年記念の交流会と 記念式典を開催

一〇月二五日、福岡市内にて「フードネットin九州」を開催し、九州全域の農業・食品産業関連のお客さまや金融機関など一三八人にご参加いただきました。

全日本農商工連携推進協議会会長で元ローソン・ジャパン社長の都築富士男氏から「農商工連携の重要性と課題について」と題してご講演いただきました。旧農林公庫福岡支店の交流会発足から二〇年目に当たり、当時発起人だった方もお迎えしました。参加者からは「充実した会なので、今後も続けてほしいです」などの感想をいただきました。

(九州地区統轄)



講演に熱心に耳を傾ける参加者

大阪市内で食品産業の 企業交流会を開催

一〇月二六日、近畿地区の食品産業の皆さまの情報交換や自社のPRなど、新たなビジネスにつながる交流の場として「第一回近畿地区食品産業交流会」を開催し、三五人にご参加いただきました。

「加工品の北米輸出への取り組み」と題して、近畿大学准教授の傍ら、水産物の加工・輸出事業にも取り組む株式会社食縁代表取締役の有路昌彦氏にご講演いただきました。参加者からは「他県の特徴的な業者と情報交換ができ、有意義でした」「来年度も継続開催を望みます」などの感想が寄せられました。

(近畿地区統轄)



講演では今注目の「ウナギ味のナマズ」の話も

新規就農を希望される方へ

幅広く利用できる無利子の 青年等就農資金をご案内いたします

新たに農業経営を開始される方を支援するための資金です。
市町村から青年等就農計画の認定を受けた「認定新規就農者」による農業生産のための施設・機械の取得のほか、家畜の購入費・育成費、借地料の一括前払いなどを対象としており、幅広い事業にご利用いただけます。

■ 青年等就農資金の概要

ご 利 用 いただける方	認定新規就農者 ※市町村から青年等就農計画の認定を受けた個人・法人	
資 金 の 使 い み ち	青年等就農計画の達成に必要な次の資金 ただし、経営改善資金計画を作成し、市町村を事務局とする特別融資制度推進会議の認定を受けた事業に限ります。	
	施設・機械	農業生産用の施設・機械のほか、農産物の処理加工施設や、販売施設も対象となります。
	果樹・家畜等	家畜の購入費、果樹や茶などの新植・改植費のほか、それぞれの育成費も対象となります。
	借地料などの一括支払い	農地の借地料や施設・機械のリース料などの一括前払いなどが対象となります。 ※農地の取得費用は対象となりません。
	その他の経営費	経営開始に伴って必要となる資材費などが対象となります。
融 資 条 件	返済期間	12年以内（うち据置期間5年以内）
	融資限度額	3,700万円
	利率（年）	無利子（お借入の全期間にわたり無利子です）
	担保・保証人	実質的な無担保・無保証人制度 担保：原則として、融資対象物件のみ 保証人：原則として個人の場合は不要、法人の場合で必要な場合は代表者のみ
ご 留 意 いただきたい 事 項	1 国の補助金を財源に含む補助事業（事業負担金を含む）は、本資金の対象となりません。ただし、地方公共団体の単独補助事業や融資残補助事業（経営体育成支援事業）は対象となります。 2 審査の結果により、ご希望に添えない場合がございます。 3 上記以外にも資金をご利用いただくための要件等がございます。 詳しくは、事業資金相談ダイヤル（0120-154-505）または最寄りの日本政策金融公庫支店（農林水産事業）までお問合せください。	

メール配信サービスのご案内

日本公庫農林水産事業本部では、メール配信による農業・食品産業に関する情報の提供をしています。メール配信サービスの主な内容は次の4点です。

- ①日本公庫の独自調査（農業景況調査、食品産業動向調査、消費者動向調査など）結果
- ②公庫資金の金利情報や新たな資金制度のご案内、プレス発表している日本公庫の最新動向
- ③農業技術の専門家である日本公庫テクニカルアドバイザーによる農業・食品分野に関する最新技術情報「技術の窓」
- ④日本公庫が発行する『AFCフォーラム』『アグリ・フードサポート』のダウンロード

メール配信を希望される方は、日本公庫のホームページ（http://www.jfc.go.jp/n/service/mail_nourin.html）にアクセスしてご登録ください。（情報企画部）

◆一〇月号の表紙の稲の杭掛けを懐かしく拝見しました。また、特集「農業インフラを思索する」も、興味深く拝読しました。

さらに「観天望氣」の荒幡克己氏の「水田農業の生産性向上が簡単には進まないことをしっかりと説明すべきである」とことへ、広く国民に理解を求めることに同感です。生産性の向上やコストダウンは農業の発展に不可欠ですが、製造業とイコールと考えるのではなく、日本の農業は生産者の地道な努力により成り立っているものなのです。

また、「農と食の邂逅」の遠藤さん姉妹の和牛五〇頭の放牧は実にうらやましいことです。明春、隠岐の島に山菜採りに行く予定なので、伺っ

ていろいろ体験談を聞きたいと念じています。（稲城市 杉浦孝蔵）

みんなの広場へのご意見募集

本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを同封の読者アンケートにてお寄せください。「みんなの広場」に掲載します。二〇〇字程度ですが、誌面の都合上、編集させていただきます。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記してください。掲載者には薄謝を進呈いたします。

「郵送およびFAX先」

〒〇〇〇〇〇〇四

東京都千代田区大手町一〇九四

大手町フィナンシャルシティノースタワー

日本政策金融公庫

農林水産事業本部

AFCフォーラム編集部

FAX 〇三三三七〇一三五〇

編集後記

④フランスのブドウ畑の映像でブルゴーニュワインが、スコットランドの丘の映像でウイスキーを飲みたくなる私。同様に、外国人が日本の田園風景を見て日本酒が飲みたくなってくれたらうれしいですね。それにはまず、日本の農村を理解していただくこと。インバウンドの増加は、農産物や食品の輸出にもチャンスです。（嶋貫）

④霜寒の候、皆さまお変わりなくお過ごしですか。私が手紙を出したのは何年前のことでしょう。今はメアドを知っていても住所は分からない友人もあり、「農と食の邂逅」のゆきえさんの「手書きの手紙」にハッとしてしまいました。年賀状を書く季節。心を込めた一言を添えて出そうと思います。皆さまの一年間のご愛読に感謝します。（小形）

④居酒屋探訪に蔵元での仕込み体験、そしてカレーうどんとのベストマッチを見いだすなど、魚住さんの行動には目を見張るものがあり、読んでいてワクワクしました。魚住さんのように、大いなる好奇心を持ち、興味があることに思い切ってアクションを起こしていいたら、新しいこと、楽しいことに多く出会えそうです。（城間）

④多くの都市住民や外国人にとつての「第二のふるさと」となっている大分県宇佐市安心院町。豊かな自然や心温まるおもてなしによって、縁もゆかりもない人々に癒やしを与えており、そこには農泊した人にしか味わえない感動があるといえます。「第二のふるさと」を求め、まずは一泊して「遠い親戚」になれたらいいな。（林田）

AFCフォーラム

編集

大本 浩一郎 嶋貫 伸二 清村 真仁
飯田 晋平 小形 正枝 城間 綾子
林田 せりか

編集協力

青木 宏高 牧野 義司

発行

（株）日本政策金融公庫 農林水産事業本部
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp
ホームページ <http://www.jfc.go.jp/>

印刷 凸版印刷株式会社

販売

（一財）農林統計協会
〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13
目黒・炭やビル
Tel. 03(3492)2987
Fax. 03(3492)2942
E-mail publish@aafs.or.jp
ホームページ <http://www.aafs.or.jp/>

定価 514円（税込）

④ご意見、ご提案をお待ちしております。

④巻末の児童画は全国土地改良事業団体連合会主催の「ふるさとと田んぼと水」子ども絵画展の入賞作品です。

国産にこだわり 農と食 をつなぎます。



第9回 **アグリフード EXPO** 大阪 2016
プロ農業者たちの国産農産物・展示商談会

日時

2月18日^木/19日^金
10:00~17:00 10:00~16:00

主催



日本政策金融公庫

会場

ATC アジア太平洋トレードセンター



インバウンド、農への条件

■AFCフォーラム 平成27年12月1日発行(毎月1回1日発行)第63巻9号(784号)
■発行/(株)日本政策金融公庫 農林水産事業本部 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-4 Tel.03(3270)2268
■販売/一般財団法人 農林統計協会 〒153-0064 東京都目黒区下目黒3-9-13 Tel.03(3492)2987 ■定価514円 本体価格476円



『「田の神さまありがとうございます。そしてゆっくり休んで下さい。」はじめて見た。田の神さまをもてなす「奥能登あえのこと」』
宮本 耕太 石川県小松市立能美小学校

AFCフォーラム(2015年12月号) 読者アンケート

「AFCフォーラム」をご愛読いただきまして、ありがとうございます。本誌をより充実させるために、アンケートにご協力をお願いいたします。このままFAXか郵送でお送りください。

お名前 (フリガナ)	性 別	年 齢	職 業
	男性 女性	歳	
ご住所	〒 ー ー		
	tel. ー ー		

1 掲載記事について、内容はいかがでしたでしょうか？（○をご記入ください）

記事区分		良かった	どちらとも いえない	良くなかった	記事区分		良かった	どちらとも いえない	良くなかった
1	観天望気				8	経営紹介			
2	農村に起こすインバウンドの動きを追って				9	主張・多論百出			
3	特集 アイデアで外国人観光客誘致の地域力				10	変革は人にあり			
4	外国人観光客もターゲットに観光立県戦略				11	耳よりな話			
5	アグリフードEXPO輝く経営大賞				12	まちづくりむらづくり			
6	農と食の邂逅				13	書 評			
7	フォーラムエッセイ				14	みんなの広場			

2 AFCフォーラムで取り上げてほしい特集テーマがありましたら、ご記入ください。

3 本誌への感想や農林漁業の発展に向けたご意見などを200字程度でお寄せください。選定のうえ本誌「みんなの広場」に掲載させていただきます。

(紙面の都合上、編集させていただく場合がありますので、あらかじめご了承ください)

掲載の場合には薄謝を進呈いたします。(匿名での投稿はご遠慮ください)

ご協力ありがとうございました。